

親鸞について

佐々木恒平

1

親鸞の思想的な先駆者は、法然ではなく、明恵だと思われまます。なぜならば、明恵による念仏宗批判の最も重要な部分を、親鸞はそのまま受け入れているからです。そして、その上に、全く新しい念仏宗の基礎を築きました。浄土真宗は、他のいかなる浄土宗とも異なる、真実の宗教です。

明恵の批判は原理的なものでした。法然は選択集において、菩提心よりも念仏の方が重要である、と主張していました。これに対して明恵は、菩提心こそが悟りの唯一の原因であり、それを捨ててしまう念仏宗は、もはや仏教とは言えない、という厳しい批判を行いました。親鸞は明らかに、この批判の正しさを認めています。その上で、菩提心の生じる原因を問題にしています。そもそも、全ての人間に菩提心があるわけではありません。もしもそうであるならば、仏の教えを聞かずに、全ての人が悟りを開いてしまうことになるでしょう。ゆえに、どうすれば菩提心を生じさせることができるか、ということが、本当の問題であると言えます。

つまり、親鸞は、明恵の提起した問題を、さらに深く掘り下げようとしたのです。明恵は、菩提心こそが仏教の本質であると喝破しました。親鸞は、そこから一歩進んで、菩提心の原因を追究しようとした

した。どうすれば人は菩提心を持ちうるのか、ということ、それは、どうすれば、仏の教えを信じていない人に、信仰を持たせることができるのか、という問題です。

親鸞が追求したのは、個人的な悟り、自分一人の悟りではなく、どのようにすれば他者を悟りに導くことができるのか、という、大乘仏教の本質に関わる問題でした。それは、仏の教えを信じていない人々を、いかにして仏の教えに導くか、という問題です。つまり、浄土真宗はそもそも、非仏教徒を対象にした仏教なのです。

ここに、親鸞と明恵の立場の違いがあります。明恵の仏教は、ある意味で、仏教徒のための仏教でした。菩提心を前提とした仏教でした。しかし、親鸞の仏教は、仏教の外にいる人のための仏教と言えます。あらゆる衆生のための仏教です。それが、真宗の真宗たる所以です。

そして、彼の理論の要となるのが、阿弥陀如来の不可思議力への、絶対的な信仰です。しかしながら、親鸞の他力とは、一種の方便に過ぎないと考えられることもできます。本当の問題は、他力を信じることができるかどうか、ということであって、阿弥陀の力を信じるかどうか、ということではありません。それは、つまるところ、他者の言葉に耳を傾けることができるかどうか、仏の言葉に耳を傾けることができるかどうか、ということなのです。ここでは、仏の教えへの信仰に入る

ことができるかどうか、ということが問われているわけです。

もちろんこれは、皮相的な見方に過ぎません。他力ということの意味は、もつと深いものです。それを理解するためには、浄土真宗の教義に、もう少し分け入ってみなければなりません。

また、ここまでの議論から既に明らかだと思えますが、親鸞は、世界的な重要性を持つ人物です。龍樹や世親と比較しても、遜色がない人物だと言えます。

2

さて、教行信証の証巻に引用されている、十地経の話から始めましょう。親鸞はそこで、菩薩の十地のうちの第八地、不動地から引用を行っています。このことは、彼が、念仏が成就した状態を、第八地の菩薩に譬えていることを示しています。

ここで、浄土宗の基本的な教義を説明しなければなりません。念仏を唱える修行者には、大きく分けて二つの段階があります。一つ目が、往相の回向の段階。二つ目が、還相の回向の段階です。念仏行者は、念仏を唱えることで、浄土へ往生することができます。ここまでは、往相の回向です。そして、浄土へ行った後で、さらに現世へ戻ってくるという段階があります。これを還相の回向と言います。彼らが何のために戻ってくるのかと言えば、衆生を救うためです。この還相の回向までを含めて、ようやく浄土宗の教義は完結します。ここに、浄土宗における、衆生済度の思想を読み取ることができますでしょう。

さて、親鸞が第八地と対比したのは、還相の回向を始めた菩薩の姿でした。十地経と対比させるならば、往相の回向は、第一地から第六地までの菩薩の姿に、還相の回向は、第八地から第十地までの菩薩の

姿に、それぞれ対応していると考えられます。

十地経は、菩薩が修めるべき修業の階梯について論じたお経です。第一地から第六地までは、それぞれ六波羅蜜に対応させられています。六波羅蜜とは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、の六つの項目を修めることを言います。最後の智慧とは、般若波羅蜜のことであり、これは悟りを意味しています。したがって、第六地を終えた菩薩は、般若波羅蜜を習得し終えており、すでに悟りを開いていると言えます。ゆえに、十地経の第七地以降の部分には、悟りを開いた後の、菩薩のあるべき姿が記述されていると考えられます。

浄土に往生した念仏行者は、すでに悟りを開いています。ゆえに、還相の回向にある行者も、悟りを開いているはずです。だからこそ親鸞は、証巻において、第八地の菩薩の姿を引用したわけです。

ここで問題にしなければならないのは、第七地、遠行地の存在です。この境涯は昔から、七地沈空の難と呼ばれ、特別視されてきました。この段階には、一種独特な意味があります。菩薩は、第一地から第六地まで、少しずつ修業を積み重ね、第六地を終えたところで、ついに悟りを開きます。そのようにして、自分の悟りを成就した後は、その悟りを衆生に振り向け、衆生済度のはたらきを始めなければなりません。しかし、それが始まるのは、第八地の不動地からなのです。第七地においては、菩薩は何も行いません。

これは、お釈迦様の成道と比較すると分かりやすいと思います。お釈迦様は、六年間苦行を続けた後で、それを止め、菩提樹のもとで瞑想を始めます。そして、七日七晩の瞑想ののちに、ついに悟りを開きます。それから、お釈迦様は何をしたでしょうか。やはり、何もありませんでした。彼は悟りの深い味わいを楽しみながら、しばらくの時を過ごしていました。そのとき彼の脳裏には、教えを広めることへの消

極的な考えが生まれていました。このような意味深い教えは、知恵の劣った人々には理解できない。だから、教えを広めようとしても無意味である、自分一人でこれを楽しむのが最もよい、という考えです。そこに、梵天という神様が現われます。彼が言うには、世の中には知恵の優れた人々もいる。彼らがあなたの教えを聞けば、たちどころにそれを理解するだろう。そのような人々にとって、あなたの教えを聞くことができないということは、あまりにも不幸なことである。どうか彼らのために、教えを説いてほしい、ということでした。お釈迦様は梵天の熱心なお願いに説得され、ようやく説法を始めることになりました。

さて、このように、悟りを開いてから、梵天の勧請を受けるまでのお釈迦様の状態に対応するのが、第七地であると考えられます。これを裏付けるように、第八地の初めには、他方の世界から如来がやってきて、梵天と同じような説教をします。それによって、菩薩はようやく覚醒し、第八地で表現されるような、利他のはたらきを始めることになりました。この部分には、一種の文学的なカタルシスがあり、非常に味わい深いものになっています。ぜひ自分で読んでみて欲しいと思います。

回向とは、向きを変えるということです。十地経の菩薩は、それまで自己の向上のために修行を続けていたのが、悟りを開いた後には、もはや目標がなくなります。そこで、彼は向きを変えねばならなくなります。自己の向上のためではなく、衆生済度へと目標を変え、自身の進む方向を変えなければなりません。それが回向です。

そして、回向を行うためには、他力が必要になります。それは、お釈迦様でさえ、例外ではありません。お釈迦様にも、梵天様という他力が必要でした。十地経の菩薩にも、他方世界の如来という他力が必

要でした。そして、念仏行者に必要なのが、阿弥陀如来という他力なのです。

たとえば、ボールを投げたときに、宙を飛んでいるボールが突然向きを変えて、別の方向に飛び始める、ということはありえません。ボールが向きを変えるためには、壁にぶつかったり、バットにぶつかったりして、何か他のものから力を加えられる必要があります。そのように、他力がなければ、向きを変えることはできないのです。仏教における他力の意味も、このようなものだと考えられます。

ゆえに、阿弥陀如来の他力は、念仏行者を救うためにあるのではない、と言うことができます。これは、十地経や、梵天勧請と比較すれば明らかです。十地経の場合、他方世界の如来が現われるのは、第八地においてです。しかし、菩薩はすでに、第六地において悟りを開いています。また、お釈迦様の場合も、梵天が現われるのは、菩提樹の下で悟りを開いた後のことです。つまり、他力が必要となるのは、常に、悟りを開いた後なのです。

したがって、これらと比較するならば、阿弥陀如来の他力が必要とされるのは、念仏行者自身の悟りのためではないと言えます。そうではなく、彼が他者を救うことができるために、それが必要なのです。自分一人が悟りを開くだけならば、自力でできます。しかし、利他のはたらきを行うためには、どうしても他力が必要になります。阿弥陀の力は、そのためにあるのです。

阿弥陀様は、あなたを救うためにいるのではなく、あなたに他者を救わせるためにいるのです。それが、他力の本質です。ここにあるのは、私と阿弥陀様の、二者の関係ではありません。そうではなく、私と他者との関係を媒介するものとして、阿弥陀様が存在します。つまり、三者の関係が基本となっています。この点が、いままで見過ごさ

れてきたのではないかと思えます。

二者の關係は、それ以上発展の仕様がありません。それは閉じた關係です。しかし、三者以上の關係ならば、どこまでも広がってゆけます。浄土宗には、そのような開けた性格があり、それが、この宗教を独特なものにしています。

また、ここにこそ、キリスト教との違いがあります。浄土真宗とキリスト教は、これまでも良く比較されてきました。しかし、その類似は表面的なものに留まります。キリスト教が、神と私との二者の關係に終始するのに対して、浄土宗は、三者の關係をその中に含んでいます。ゆえに、この二つの宗教は、本質的に異なるものであると考えられます。

以上のような構造が、浄土真宗にはあると思われれます。そこには、研究の余地がまだ沢山残されています。

3

親鸞は、念仏宗徒は念仏のみに専念し、余計な計らいをしてはならない、と言っています。それは、悟りを開くための修業をしたり、仏教の教義を学ぼうとしてはならない、ということですが、そのように、ただ念仏のみに専念することが、真宗の特徴です。

このような親鸞の態度の背景にあるのは、煩惱具足の凡夫でなければ、往生はできない、という考えだと思われれます。それはつまり、もしも菩提心を持っていたならば、往生はできない、ということですが、

阿弥陀如来の誓願の第十一は、必至滅度の願と呼ばれています。浄土に往生した者は、必ず正定聚に住し、滅度に至るといふ誓願です。正定聚とは、悟りを開くことが決まっている状態のことです。この位

に一度到達したならば、そこから退転することはありません。つまり、浄土に往生した者は、その瞬間に、悟りが決まった状態に入ることができるといふことです。

ここで、もしも、菩提心が悟りの原因なのだと思えば、正定聚とは、その人の心に菩提心が生まれ、それが決して消えない状態である、と言えます。したがって、親鸞が言いたかったことは、もしも正定聚に入ってしまったならば、往生はできない、ということだったと考えられます。

どういふことかと言えば、いちど正定聚に入ってしまった人は、そこから出ることができません。つまり、いちど正定聚に入ってしまった人が、もう一度そこに入り直すことはできない、ということですが、よって、もしも、第十一願の意味していることが、浄土に往生した者を必ず正定聚に入れる、ということだとするならば、すでに正定聚に入っている人は、決して浄土に往生できない、ということになります。その場合、その人にとって二度目の正定聚になってしまう、矛盾が生じるからです。ゆえに、もしも、その人が往生してしまったならば、阿弥陀の誓願は満たされなくなってしまう。したがって、浄土に往生するためには、正定聚に入ってはならず、菩提心を持つてはならない、つまり、煩惱具足の凡夫でなければならない、ということになります。

もちろん、これは私の仮説であって、かなり強引な解釈かもしれませんが、しかし、このように考えると、親鸞の言おうとしたことが、よく分かるようになります。

阿弥陀様は、衆生に菩提心を与えます。そのため、自分から菩提心を起こそうとはいけない、ということですが、すでに菩提心を持っていたならば、阿弥陀様から菩提心を受け取ることができなくなつて

しまうからです。

さて、このように考えてくると、浄土の重要な構造が浮かび上がってきます。まず、浄土に往生する人は、菩提心を持っていません。浄土に往生することによって、阿弥陀様から菩提心を与えられ、悟りに到達します。そこで、今度は還相の回向に移ることになります。還相の回向とは、利他のはたらきです。では、利他とは何でしょうか。

利他とは、他者を救うことです。そして、あらゆる衆生にとつて、真実の救いとは、悟り以外にはありません。したがって、利他の行いとは、第一義的には、他者を悟りへと導くことです。それは、その人を仏の教えへと導くことであり、つまり、その人の心に菩提心を生じさせるということです。ゆえに、還相の回向を始めた菩薩が行うべきことは、衆生に菩提心を与える、ということに他なりません。そして、自分自身悟りを開いた菩薩には、それが可能なのです。

ここで、二人目の念仏行者がいたとしましょう。この念仏行者が浄土にやってきて、同じように菩提心を受け取ります。では、彼は、いったい誰から菩提心を与えられたのでしょうか。

それはおそらく、還相の回向にある、一人目の念仏行者からだと考えられます。つまり、いちど浄土に往生した念仏行者は、阿弥陀如来と全く同じはたらきを為しうるのであります。そして、この二人目の念仏行者も、一人目と同じように、還相の回向を開始します。

このようにして、浄土においては、ほとんど連鎖的に悟りが実現されてゆきます。そしてまた、一人の阿弥陀如来には、無数の衆生を救う力があることを思えば、一つの悟りが、無数の悟りを生み、その無数の悟りの一つ一つが、さらにまた無数の悟りを生んでゆく、という構造が現われます。そして、一つの悟りは、一人の仏に対応し、一人の仏は、一つの仏国土に対応することを考えるならば、一つの浄土

が、無数の浄土を生み、その無数の浄土の一つ一つが、さらにまた無数の浄土を生んでゆく、という構造が見えてきます。このように、無限に増殖してゆく浄土の系列全体が、極楽浄土と呼ばれているのです。ここに現れるイメージは、華嚴経における蓮華蔵世界海と比較されうるものでしょう。

以上が、私を知る浄土真宗の性質です。この他にも、まだまだ意義深く、興味深い発見があると思います。気になった人は、ぜひ研究してみてください

4

親鸞聖人はかつて歌われました。

五濁増のしるしには

この世の道俗ごとごとく

外儀は仏教のすがたにて

内心外道を帰敬せり

外道梵士尼乾志に

ころろはかはらぬものとして

如来の法衣をつねにきて

一切鬼神をあがむめり